

異文化能力としての英語力の育て方

村野井 仁

1. 大学で目指してほしい「異文化能力」としての英語力

本講義では英語力を「異文化能力」(intercultural competence)の観点からとらえ、言語や文化が異なる人々と共に生きていくために必要な技能・知識・態度の総体としての英語力について考える。

まず、3つのタイプの日本人大学生を想像してみよう：

タイプA：英語を聞き、話し、読み、書く能力はとて高く、外資系企業の就職を目指すため、国際的・国内的な事柄について深く学んでいる。海外にもよく出かけるが、心の底ではアジアの人とはあまりつきあいたくないと感じている。

タイプB：英語4技能の運用能力はある程度あり、特に対話力は高い。欧米だけでなく、アジア・アフリカ・中南米など様々な国から来る留学生と分け隔てなくつきあえ、友達も多い。日本の地理・歴史、文化(宗教、価値観)、政治などにはほとんど興味がなく、海外の人に聞かれるとうまく答えられない。

タイプC：英語は自分の身の回りのことに関しては話すことができるが仕事で使えるレベルには達していない。日本や世界のことについていろいろ興味を持ち、本を読んだり、旅行に出

異文化能力としての英語力の育て方

かけたりしている。自分とは異なる人とできるだけ多く知り合いになってみたいと思う。

異文化能力の観点から見ると、タイプAは、後述する技能と知識を備えてはいるものの、態度に弱さを持つ。タイプBは技能と態度には問題がないが知識が乏しい。タイプCは知識と技能は整っているものの、十分な技能が伴っていない。

筆者が本講義において理想的な英語学習者・英語使用者像として考えるのは、次のような人物像である：

タイプD：自分のこと、自分の文化（価値観、宗教）、地域（地理、歴史、特徴）、日本社会（政治、経済、国際関係）そして世界で起きていること（人権・差別、環境、紛争と平和、貧困など）に関する知識をそれなりに持ち、英語でそれらの問題の概要や自分の考えを一定程度表現することができる。いろいろなことに興味・関心を持ち、たくさんの本を読んだり、映画を見たりして、できるだけ自分の視野を広げようとしている。自分とは文化や価値観が違う人と出会っても、まずは様子を見て、相互交流の可能性を探る姿勢を持っている。

タイプDは、異文化能力の3つの構成要素（技能・知識・態度）それぞれをバランスよく備え、英語を使って意味のある行動ができる大学生の人物像である。

2. なぜこのような英語力が必要なのか

上記のような異文化能力としての英語力がなぜ日本人英語学習者に求められるのだろうか。よく言われるようにグローバル化された国際社会の中で、競争に負けないためであろうか。就職競争で勝ち抜くためであろうか。個々の英語学習者がどのような目的を持とうともそれは当然自由なのであるが、筆者が今強く感じるのは、英語教育は競争に勝つために行われるものではないということである。かけがえのない命を持った異なる人同士が互いの違いを力として共に生きていく。そのために英語を含む外国語・第二言語の習得が必要であると筆者は信じている。このことを見失うと英語教育・英語学習はとても危ういものになってしまう。英語帝国主義ということばが表すように競争に煽られて英語を学んだ者は競争に勝ったあげく英語力のないものを見下し、差別する人になってしまうであろう。

人が共生できる社会を作るために教育があるという考え方は、日本の教育基本法第1条にも「教育の目的」として「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家および社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」と示されている。もっと身近な東北学院のモットー：Life, Light and Love for the World や文学部のモットー：Think for Yourself, Think for the World にも人類の福祉への貢献、そして人類の共生への強い願いが含まれている。

3. 異文化能力 (intercultural competence) とは何か

本講義では異文化能力を「ことばや考え方などの文化が異なる人となんとかうまくつきあって生きていくために必要な技能、知識そして態度」と定義する。ここで言う「文化」はことば、価値観、宗教、考え方、生き方

異文化能力としての英語力の育て方

などを広く含むものであり、これらの文化的要素が異なる相手は必ずしも国境を挟んだところに存在するとは限らず、性別、世代、身体的特徴、話し方などの「文化」が異なる相手は自分の身の周り、あらゆるところに存在する。つまり、異文化能力は外国の人との交流にのみ必要なものではなく、自分と何らかの点で異なる相手とのつきあいに必要な力という前提に立つ。

異文化能力は以下の構成要素によって成り立つと考えられる (Byram, 1997, 2008 ; 村野井 2006 ; 村野井・尾関・富田・渡部 2012) :

- ① 技能 (skills) : コミュニケーション能力, 調査能力, 分析能力, 批判的思考
- ② 知識 (knowledge) : 自文化と異文化に関する知識, 世界に関する知識, 地理・歴史に関する知識
- ③ 態度 (attitudes) : 共感 (想像力), 相対化, 差別・偏見を持たない姿勢, 異なるものへの寛容さ (cross-cultural tolerance)

異文化を持つ人の共生に必要とされるこれらの能力及び資質それぞれをどのように伸ばすべきなのか考えてみたい。

4. 異文化能力としての技能

異文化共生のために必要なのは、異文化間コミュニケーションを可能にする第二言語の能力である。これは母語以外の第二言語、例えば英語を用いて「自分のこと、地域のこと、自分が住む社会のこと、そして世界のことについて理解したり、伝えたりできるコミュニケーション能力」を意味する。ここで注意したいのは、以下の図が示すようにそのようなコミュニ

異文化能力としての英語力の育て方

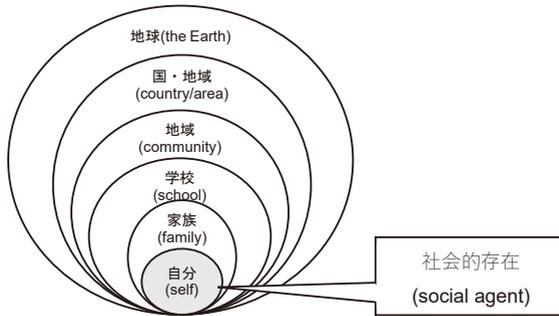


図 1. 社会的存在としての第二言語使用

ケーション活動を行う際に活動を行う主体は「社会的な存在 (social agent)」であるべきだということである。単なる「学習者」として社会的に意味のない内容を理解したり、まねたりするだけではなく、たとえ初級レベルであっても学習者自身が自らを育て、自分と他者をつなぐような第二言語学習そして使用を展開することが重要である。

社会的存在としての個人（学習者）が第二言語を通して他者と関わり、その過程の中で第二言語能力そのものを発達させていくのがもっとも効果的な第二言語「学習」法である。現在の中学・高等学校の英語教科書は図 1 に示すような学習者と世界との関わりを促すような題材を盛り込んだものが多い（例：村野井他 2011-2013）。

文部科学省が小・中・高一貫した英語到達目標として示している能力記述表、いわゆる CAN-DO リストも図 1 に示すような個人と社会の関わりを重視した造りになっていると見ることも可能である（中央教育審議会 2016）。

英語運用能力の到達度目標において日本人英語学習者にめざしてほしいのは CEFR (Common European Framework of Reference) (Council of

Europe, 2001)のBレベルである。これは自立した言語使用者(independent user)として、その言語を用いて一定の仕事ができたり、生活を支えたりすることのできるレベルである。基本的な言語使用者(basic user)であるAレベル(旅行, 買い物, おもてなしなど基本的なことができるレベル)の完全到達を土台として、まずはB1レベル, そしてより高度なB2レベルを目指してほしい。

このような自立した英語使用者になることを日本人がめざす際に、考慮すべきなのがどのような英語話者になるのかということである。日本語を母語とするものが英語を話す際に、日本語訛り(accent)が英語に表れることは、その人のアイデンティティに関する重要な情報を示すということ、そして、どの国や地域の人とも等距離を保つことができることなどの多くの点で利点があることも認識したい(本名 1999; 末延 2010; 村野井 2006 他)。相互理解を前提条件として、それぞれの母語の特徴を残した様々な英語の変種が国際補助言語として人々をつないでいる現状を日本人英語学習者にも把握してほしい。そのためにはロールモデルとして英語を話す日本人の映像・動画を視聴することが有効であると考えられる。英語の変種を話す者同士が相互に理解し合うためには、それぞれが英語の基本的な音声的特徴や基礎語彙・文法を習得することが必要となる。そのためにもCEFR Aレベルの達成が求められる。

5. 第二言語コミュニケーション能力の伸ばし方

自立した英語使用者として社会の中で英語を使いこなすための理解力そして表現力を伸ばすためには以下のような英語指導法・英語学習法が効果的であると考えられる。

異文化能力としての英語力の育て方

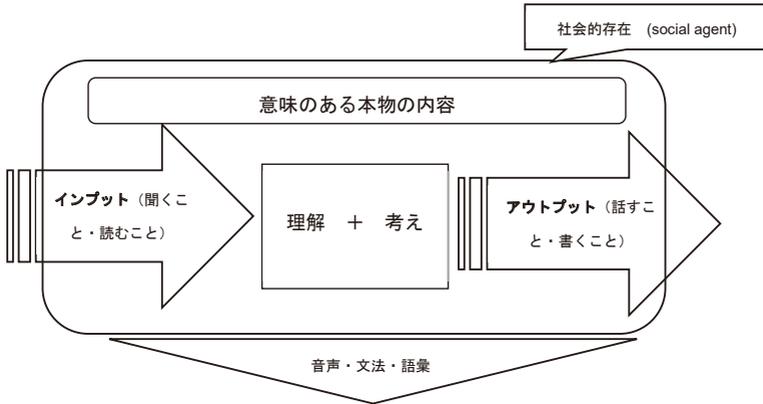


図2. 第二言語コミュニケーション能力を育てる学習法・指導法の概略

この図が示すのは特別な学習法・指導法ではなく、学習者が社会的存在として意味のある題材内容について英語で聞いたり、読んだりして内容を理解し、そして内容に関する考えを深め、それを話すこと、書くことで他者に伝えようとするインプットからアウトプットにつながる一連の言語活動を示したものに過ぎない。その活動には音声的能力、文法力・語彙力の支えが必要であることも図2は示している。単純な学習過程・指導過程ではあるが、このような学び方は第二言語習得を促進する認知プロセスと重なるものであり、言語習得理論から見ても効果的であると予測することができる（村野井 2006；Muranoi, 2007）。

図2が示す学習過程を実践する例として、TEDを用いた英語学習法を紹介したい。TEDとはインターネット上で「広めるに価値のあるアイデア」(ideas worth spreading)を共有するために開かれたサイトである(www.ted.com)。ほとんどのものが10分程度の長さで、字幕やスクリプトをネット上で無料で利用することができる。TEDから自分にとって意味のある

トークを探し、スクリプトを入手し、以下のような手順で英語学習を行う。

- ① インターネット接続のパソコンで面白そうな TED スピーチを探す (TED 画面の検索機能を使ってキーワードを入れて探す)。
- ② 視聴して面白そうなものの文字原稿を入手する (subscript からスピーチの原稿をコピーし、ワード文書にペーストする)。
- ③ ワード文書をプリントアウトし、文字原稿を読み込む。わからない語句はなるべく英英辞典を使ってわかりやすい英語に書き換える。
- ④ 文字を見ながら視聴した後で、原稿も字幕も使わず視聴する (この段階からスマホ「マイトーク」が便利)。
- ⑤ 音声だけを聞きながら音が聞こえたらすぐ声を出してついていくシャドウイングを (できたら) やってみる。
- ⑥ スピーチに含まれていた語句をなるべく使いながら、スピーチの概要と自分の感想・考えを英語でまとめる。

自分にとって意味のあるトークを選びさえすれば、これは英語学習であると同時に英語使用でもある。国内にいながら英語使用を継続的に行うことが可能になる。筆者は英文学科1年生対象の「英語学習法I」という専門科目において例年この課題を最低1回行うよう受講者に指示している。多くの学生が知的な内容のものを選び、知的なコメントを英語で書いてくる。これを一週間に1トーク程度のペースで数ヶ月続ければ、理解力・表現力は着実に高まると予測される。

6. 異文化能力としての「知識」(knowledge)

英語力は身についたけれど、話す内容が乏しい。世界の人と交流するつもりなのだけれど世界のことを知らない。このような状況に陥らないために知識を増やす必要がある。異文化間コミュニケーションに必要な知識として、以下の3点を挙げたい。

- ① 自文化と異文化に関する知識：日本ってどんな国？日本人ってどんな人たち？他の国や地域では何が大切にされる？宗教との関係は？
- ② 世界に関する知識：今、世界で何が起きているのだろうか？
- ③ 地理・歴史に関する知識：日本は世界の中でどんなところにあるのか、アジアの近隣諸国と日本の間にはどんなことがあったのか？

これらの知識が少ないと対話相手から「幼い」と思われる恐れがある。かつて筆者が米国の大学で日本語を教えていた時に受講生の一人であったシンガポールの女性がアジアの歴史についてほとんど知らない日本人留学生に対してこのような印象を述べていた。世界で起きた、そして起きている大切なことについて知らないとこのような評価を受けることになってしまう。異文化能力としての英語力とは、このような知識も含むものと考えたい。

世界に関する知識を学ぶ動機を高めるために前述の「英語学習法Ⅰ」の授業では、world knowledge test と称して、以下のような問いを受講生に投げかけている。

World Knowledge Test (一部)

- 問2 日本は現在の韓国および北朝鮮を1945年までの_____年間、植民地支配していた。
- 問7 日本国憲法第__条は、戦争を放棄することおよび戦力を保持しないことを定めている。
- 問8 ナチスドイツが600万人を超すユダヤ人に対して行った大量殺戮を_____と呼ぶ

World Knowledge Test はわずか18問のテストで構成され、包括的なものではない。そのねらいは、高校で世界史や日本史を履修したかどうかに関係なく、「社会的存在」として知っておくべき自文化を含んだ世界に関する知識というものがたくさんあり、それを意識的に増やしていかなければ意味のある異文化コミュニケーションが困難になるという事実を大学生に伝えることである。この知識を増やすためのヒントとして、書店、古書店、図書館にふらっと立ち寄ること、いい映画を見ること、新聞を読み、ニュースを見ること、教養教育科目を大切にすること、そしてインターネット上の煽情的な「えせ知識」に気を付けることなどを「英語学習法I」では紹介している。

7. 異文化能力としての「態度」(attitudes)

高度な英語力を持ち、世界について幅広い知識を持っていたとしても、偏狭な差別思想を持っていたら異文化間コミュニケーションは成り立たない。このような差別、偏見などは態度(姿勢と呼ぶこともある)の問題である。異文化能力を構成する態度として重要な4点を挙げたい:

異文化能力としての英語力の育て方

- ① 共感（想像力）（empathy/imagination）：相手の立場に立って痛みを感じる態度・姿勢。もし自分がいじめられたら、自分がもし難民（refugee）・避難民（evacuee）になったら、住んでいる家の上から爆弾が降ってきたらなどの状況を想像できる姿勢
- ② 相対化（relativizing）：第3者として客観的に自分を見る態度・姿勢
- ③ 差別・偏見を持たない姿勢（attitudes against discrimination and prejudice）
- ④ 異なるものへの寛容さ（cross-cultural tolerance）：いやだなどと思う気持ちを一瞬保留して、理解し、受け入れる態度・姿勢

4点目のネガティブな感情をいったん保留するという姿勢は、Byram (1997) が重要視する以下の態度の定義に倣っている：“Curiosity and openness, readiness to suspend disbelief about other cultures and belief about one’s own” (p. 50) 「好奇心とところを開く態度。他の文化に対する不信感と自分の文化に対する信念をいったん保留する心の余裕」

差別・偏見を育てるのは無知・無関心・不寛容であり、いわゆる反・知性主義（内田（編）2015 他）ということばに表される知性を拒む姿勢・態度であると思われる。異文化能力としての英語力を高めるということはこのような流れに厳然と立ち向かうことでもあると筆者は考えている。

8. ま と め

本講義では、これからの多文化社会において言語や文化が異なるいろいろな人とお互いの違いを認め合いながら、豊かに共生できる社会を作るために必要な「異文化能力としての英語力（技能・知識・態度）」について

その概要を紹介した。

参 考 文 献

- Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for intercultural citizenship*. Multilingual Matters. 【翻訳】細川英雄 (監) 山田悦子・吉村由美子 (訳) (2015) 『相互文化的能力を育む外国語教育：グローバル時代の市民性形成を目指して』大修館書店
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon, UK : Multilingual Matters.
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment*. Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- Muranoi, H. (2007). Output practice in the L2 classroom. In R. DeKeyser (Ed.), *Practice in a second language : Perspectives from applied linguistics and cognitive psychology* (pp. 51-84). Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- 内田樹 (編) 『日本の反知性主義』晶文社
- 末延岑生 (2010) 『ニホン英語は世界で通じる』平凡社新書
- 本名信行 (1999) 『アジアをつなぐ英語－英語の新しい国際的役割』アルク
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語指導法・学習法』大修館書店
- 村野井仁・尾関直子・富田祐一・渡部良典 (2012) 『統合的英語科教育法』成美堂
- 村野井仁他 (2011-2013) 『高等学校外国語科用文部科学省検定済教科書ジーニアス・コミュニケーション英語 I-III』大修館書店
- 中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」(答申) 文部科学省